

多文化共生社会実現に向けた道徳授業の構築を目指して

フィリピンでの「四本の木」の実践を通して

土田 雄一・松田 憲子

Toward the Construction of Moral Classes for the Realization of a Multicultural Society

Through the practice of “Four Trees” in the Philippines

TSUCHIDA Yuichi / MATSUDA Noriko

要約

本研究は、多文化共生社会実現に向けて、フィリピンでの教材「四本の木」を活用した授業の実践とその分析を通して、よりよい道徳授業の構築を目指した実践研究である。価値の明確化理論に基づいた第1回実践では、児童からは2018、2019年の実践と同様に高い評価を得、現地教員からも高い評価を得ている。そこで、日本人教員と現地教員が協働で第2回実践をしたところ、児童の授業評価は、第1回実践が高いものの、「自分の生き方を考える」ねらいに対してのワークシートの記述分析では、現地教員と協働で実施した第2回実践の方が高かった。これは現地教員が「四本の木」をもとにしたValueの指導を実施し、自分の将来を考える展開をしたことによる。今回の協働実践を通して、双方の授業アプローチについて相互理解が進んだと考える。今後は、協働実践研究を継続するとともにValue教育の教材や授業展開について調査研究をし、日本の道徳授業改善の一助としたい。多文化共生社会実現に向けた道徳授業の充実のためには、新たな教材開発、指導方法の開発が課題である。

キーワード：多文化共生、道徳授業、協働実践、「四本の木」、フィリピン

1. 問題の所在と目的

「コロナ禍」により、一時は減少していた在留外国人数は、令和4年12月末には307万人を越え、「コロナ禍」前よりも増加している（出入国管理庁）。外国人児童生徒数は「コロナ禍」においても増え続けており、令和3年度学校基本調査（文部科学省）によると11万4千人を越えている。入国管理法の改正（2018）もあり、国内における国際化はさらに加速することが予想される。今後

は、外国人と国内で一緒に仕事をしたり、隣人として生活したりすることが珍しくなくなり、いわゆる「多文化共生社会」が現実のものとなる。多文化共生社会とは、「国籍や民族などの異なる人々が、文化的な違いを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、共に生きていく社会」をさす。

しかし、豊かな多文化共生社会の実現は容易ではない。言語や文化・習慣が異なる多様な人たちとの生活は、時には問題が生じる。人種差別問題

や宗教問題を含め、言語や文化的な違いを認め合い、対等な関係を築くためにはどのようにしたらよいのだろうか。

その糸口を道德教育の視点から検討したのが、本研究である。

「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科道德編」（文部科学省）には、「多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、自立した個人として、また、国家・社会の形成者としてよりよく生きるために道徳的価値に向き合い、いかに生きるべきかを自ら考え続ける姿勢こそ道德教育が求めるものである」とし、まさに多文化共生社会実現に向けた道德教育の在り方を示している。

しかしながら、松田・土田（2021）が、多文化共生社会実現に向けた道德授業の在り方を教科書教材の分析から検討をしたところ、「全8社の教科書教材（1,721本）の分析では、海外素材教材は295本（17.1％）であるが、実質的な交流があるものに絞ると81本（4.7％）であり、交流がある教材が少ない」ことが明らかになった。「文化的な違いを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、共に生きていく社会」を築くためには、「公正、公平、社会正義」「相互理解、寛容」「個性の伸長」「友情、信頼」等をねらいとした交流教材を増やす必要があると指摘している。

さらに、今後は、「道德科で活用する教材、内容項目のほか、指導方法と関連させて考える必要がある」とし、「これまでの指導方法を改善しながら、多文化共生社会に必要な資質能力を育成する必要がある」と述べている。

一方、土田ら（2018・2019）は、「自分の生き方を考える教材」として、「四本の木」（後述）を活用し、日本だけでなく、フィリピンにおいても実践研究をし、日本の教材（「四本の木」）と「価値の明確化理論」に基づいた指導方法が高い評価を得ていることを報告している。

本研究では、これまでの実践研究をふまえ、授業展開を修正するとともに、現地教員と協議をし、協働で授業を進めることで、フィリピンで実施しているValue教育の知見を得て、よりよい道德授業の構築をめざすことを目的としている。

2. 方 法

（1）対 象

サンカルロス大学附属初等中等学校ノースキャンパス（私立・フィリピン）Grade 5 2クラス

※2018・2019年の実践とは別の学校

（2）授業者

千葉県公立中学校教員1名、小学校教員1名と現地教員（第2回のみ）

（3）実施日

2023年2月22日（第1回：日本人現職教員）

23日（第2回：日本人現職教員＋現地教員）

（4）方 法

TTによる対面式授業（「Value」の時間で）

使用言語：英語

（5）教 材

「Four Trees」（原題：「四本の木」：上島博・木瀬達也、『児童心理』2015より）

【あらすじ】

一樹という高い木が強風で折れてしまう。それをみて、小さな三本の木は考えた。大樹は「しっかり根をはり太い幹をもつ木」に、優樹は「芯は強く柔らかくしなやかな木」に、友樹は鳥に種を運んでもらい、「いろんな木がともに生きる森」になり、長く生き続ける。一方、折れた一樹も再び新しい芽をだして生きる。

英語に翻訳し、状況がわかりやすいようにパワーポイントを作成（2108・2019年と同じ）。

（6）ねらい

よりよく生きる喜び（関連）希望・勇気・努力と強い意志

（7）分 析

①授業分析（VTR）

②児童のワークシート分析

③現地教員の評価等

3. 授業展開（第1回）の概要

（1）授業展開（第1回）の概要

第1回（Grade 5-1）の授業展開は以下のとおりである（Grade 5は小学校5年相当）。授業者は日本人現職教員2人がTTで実施した。

基本的な展開は2018年と2019年に実施した「価

値の明確化理論」に基づいた展開である（表1）。個人①→グループ→全体→個人②のステップで展開した。個人の「生き方」をさらに明確にするために、今回は「⑧自分がなりたい木になるためにはどうしたらよいか考える」を加えた。自分のなりたい姿（目標）を明確にただけでは目標達成はできない。今回は、その目標に向かっての具体的なアプローチのイメージを持たせることにしたのである。

表1 授業の流れ2023

※下線部=2023実践の変更点

- ①授業者の自己紹介をする。
- ②本時の学習課題を示す。
（『「四本の木」を通して自分の生き方を考えよう』）
- ③「Four Trees」（「四本の木」）を読んで自分の生き方について考える。
・パワーポイントを用いて、「四本の木」の英訳文を読み進める（音声動画を視聴する）。
- ④個人で「どの木が共感できる？」を四本の木から選択して、その理由を、付箋カードに書く。
- ⑤グループ（4人組）を作り、自分が選んだ理由をグループのメンバーに説明する。
・全員の説明と質問後に、付箋カードを黒板の「選択した木」の下に貼る。
- ⑥全体で共有する。
・特色のある児童から説明をしてもらう。
- ⑦自分がどんな木になりたいか再度考える（個人：ワークシート）。
- ⑧自分がなりたい木になるためにはどうしたらよいか考える（2023年の新たな取り組み）
- ⑨今日の学習のふりかえりをする。

（2）授業の実際

初対面の授業者と子どもたちであったが、授業はおだやかな雰囲気スタートし、子どもたちは集中していた。

本時の学習課題（Today's goal）として、「Through the way of life of "Four trees" to reflect on yourself and think about a better way to live.」を示し、ホワイトボードに貼った。そして、全員で声を出して読み、本時の学習課題を明確にして進めた。

そして、パワーポイントで作成した「四本の木」の英語版教材を視聴した。視聴後、ホワイトボードに「四本の木」（Daiki, Yuuki, Tomoki, Kazuki）の特徴を確認して後でも視覚的に思い起こせるよ

うに掲示した。

「共感した木」「よいと思った木」を「付箋」に書き、その理由も記述するように指示した。どの木にするか悩んでいる子もいたが、全体的には円滑に進んでいた。

次に4人のグループを作り、お互いの考えを交流した。このクラスでは「床に座って考えの交流をする」のが特徴的であった。

考えの交流のあと、自分の付箋を選んだ木の下に貼り付けた。全員が貼った後にいくつかの付箋を取り上げ、どうしてそれを選んだのかを説明してもらった。全体での考えの共有である。それぞれの考えをよく聴き、拍手をしていた。

次に「自分がなりたい木」について考えさせた。「四本の木」の中から選択してもよいし、新たな木を自分で選んでもよいことを確認した。ワークシートに「なりたい木」と「その理由」を書くように指示した。

子どもたちは一樹や優樹、友樹などのほか、「独立した木 ソフトだけど強くて、自分で感情をコントロールできるようになりたい」のように自分の考えた木を書く児童もいた。「一樹 幹が折れても決してあきらめないところ」「優樹 柔軟で変化に対応できるようになりたい」「友樹 コミュニケーションをよくとってフレンドリーで親切で強いから」等の理由を書いていた。

「そのような木になるためにはどうしますか」の問い（新設）については、「一樹 よくない時でも決してあきらめず、よくなろうとトライしたい」「優樹 自分をコントロールする方法を学んだり、我慢強くなりしたい」「友樹 コミュニケーションをとって、フレンドリーにする」等のほか、「一樹は決して人生をあきらめず、新たに生まれたから。何があっても神を信じる。いつも信念を持つ」という神について記述する児童もいた。

発表後にふりかえりを行い、本時で学んだことをワークシートに記述した（内容は後述）。

全体的に流れはスムーズであり、これまでの実践と同様、よい雰囲気で終了している。

(3) 授業後の協議会について

Value授業を担当する3人の現地教員を交えて「四本の木」(Grade 5-1)の授業について協議を行った。授業についてはこれまでの実践同様に高い評価を得たが、特にGrade 5を担当する現地教員Aは「四本の木」の教材を「Value授業でも活用できる教材である」と評価した。そこで、翌日のGrade 5-2での第2回実践を協働で実施できないかを提案。現地教員Aが協働実践の提案を快諾したので、急遽、日本人現職教員と現地Value担当教員との協働授業を実施することとなった。協働授業の詳細は後述する。

4. 授業展開(第2回)の概要

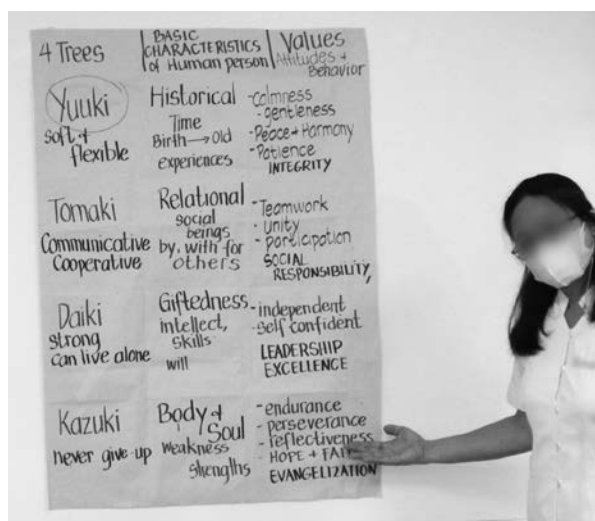
(1) 授業展開(第2回)の概要

第2回(Grade 5-2)の授業展開は以下のとおりである。授業者は日本人現職教員2人とValue教育担当現地教員がTTで実施した。

前半の①～⑥(表1)までを日本人教員が担当し、後半(⑦～⑨)は現地教員Aによる授業である。主な流れは次のとおりである(表2)。

表2 授業の流れ(後半:現地教員A)

- | |
|--------------------------------------------------|
| ⑦「四本の木」が持つValueについて表を元に話し合う。 |
| ⑧自分の未来の姿について考えながら、自分がどんな木になりたいか再度考える(個人:ワークシート)。 |
| ⑨今日の学習のふりかえりをする。
・学んだことをワークシートに書く。 |



現地教員Aは、自作の表(写真)を用いて、「四本の木」のそれぞれがどんな「価値」を持っているかを説明していた(表3)。

表3 「四本の木」のValue分類

四本の木	人間の基本的な特徴	価値／態度と行動
ユウキ やわらかく 柔軟	歴史的 時間 生まれる →歳をとる経験	落ち着いた優しさ 平和と調和 忍耐、統合
トモキ コミュニカ ティブ 協力的	関係性のある 社会的な存在 他者によって、他者 と、他者のために	チームワーク 団結 参加 社会的責任
ダイキ 強い 一人で生き られる	才能または能力 知性 スキル 意思	自立(独立している) 自己の自信 リーダーシップ 優秀さ
カズキ あきらめな い	身体と魂 弱さと強さ	持続性 根気(やりぬく力) 熟考、反省 希望と信念(信仰) 福音伝道

そして、「これらの価値を生きる方法として考えてみましょう。」「目を閉じて、10年後の自分自身を想像してみましょう。どんな木になっていますか。」と問いかけ、さらに「今から10年後は素晴らしい人間になっていますか?すでに自立していますか?自身に満ちていますか?美しい木になっていますか?」と問いかけている。

そして、「息を吸って、吐いて、目を開けてください。」と指示をしている。また、「将来のために祈りましょう。」という問いかけもあり、やはりクリスチャンとしての教えを第一にしていることが分かる。

時間がなかったために、やや駆け足になってしまったが、最後にワークシートに「本日の学習で学んだこと」を書いて終了した(書く時間がなく、授業後に記入した児童もいた)。

5. 結果の考察

(1) 児童の授業評価について

授業後に児童にとってアンケート結果は以下のとおりである(図1、図2)。

「Q1. この授業は面白かった」に対しては、両クラスとも強い肯定が多く、特に第1回(5-1)では全員が「とてもそう思う」と回答している。日

本人の教員の授業であり、普段の異なる授業ブローチに「面白さ」を感じたと考える。その他の「Q2. 友達の考えをよく聞くことができた」に対しても第1回(5-1)の97%、第2回(5-2)の100%が肯定的評価(「とてもそう思う」「そう思う」)であり、自分の生き方を考える上で、グループや全体での友達の考えを聴く活動はできたと考える。

図1 5-1「四本の木」授業後アンケート

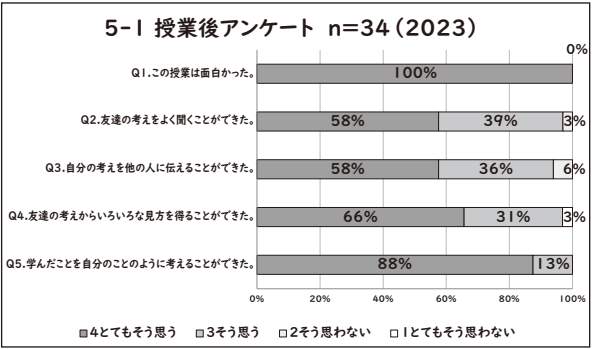
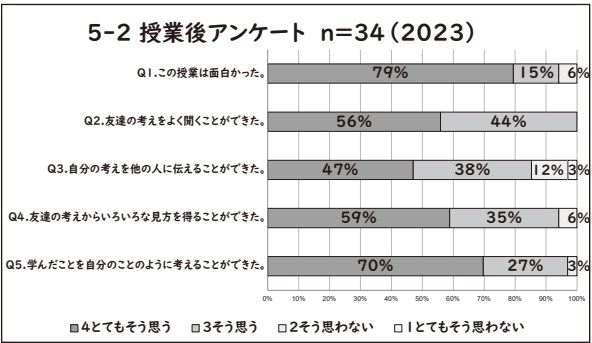


図2 5-2「四本の木」授業後アンケート



「Q5. 学んだことを自分のことのように考えることができたか」では、第1回(5-1)は全員が肯定的評価であり、「とてもそう思う」が28人(88%)いたことも評価できる。第2回(5-2)は33人(97%)が肯定的評価であり、「とてもそう思う」は23人(70%)であった。本時のねらいである「自分の生き方を考える」ことにつながったと考える。

その他の項目(Q3、Q4)も肯定的評価が高く、全体として児童に受け入れられた授業となったと評価したい(図1、図2)。

この結果は、これまでの実践(2018・2019)と共通する高評価であり、教材「四本の木」と価値の明確化理論に基づいた展開は現地の児童から高い評価を得ていることがわかる(図3、図4)。

図3 「四本の木」授業後アンケート(2018)

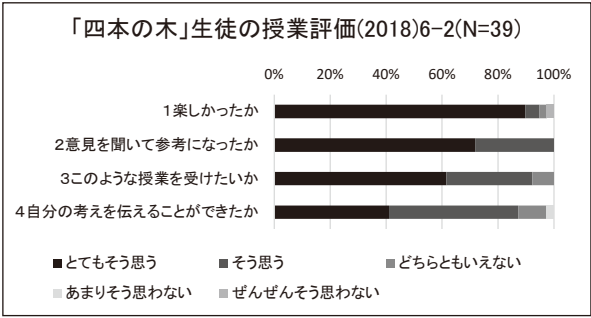
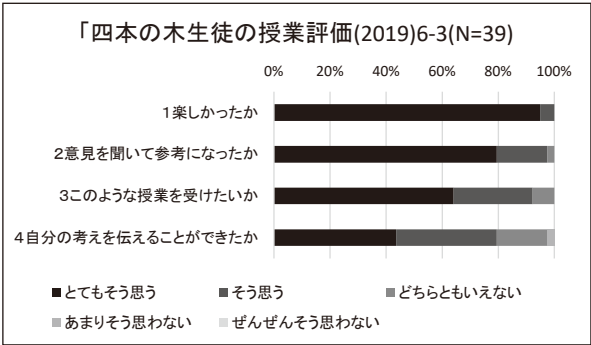


図4 「四本の木」授業後アンケート(2019)



(2) ワークシートの記述分析

①「今日の授業で学んだこと」の記述分析

授業で使用したワークシートの記述分析を実施した。最終の「今日の授業で学んだこと」については、第1回(5-1)は「四本の木について学んで楽しかった」「四本の木について、彼らがどう成長したか学んだ」など、「四本の木」についての記述が多かった。記述内容を「四本の木のみ」「四本の木と自分の生き方についてのみ」「自分の生き方についてのみ」に分けて分析をした(表4)。

表4 「ふりかえり」記述内容分類

四本の木のみ	四本の木生き方について学んだ。 四本の木がどう育っていったか学んだ。
四本の木と自分の生き方	四本の木生き方を通して、自分のよりよい生き方について学んだ。 四本の木について、そして自分自身の人生をよりよくするために四本の木からどのように生きるかを学びました。
自分の生き方のみ	自分自身を振り返り、自分のよりよい生き方について考えた。 決してあきらめないこと、より幸せになるにはいろいろな方法があること。生きるためにより良い方法は過去の過ちから学ぶこと。
その他	楽しかった。

「四本の木」は「自分の生き方について考える」ことを目標にした授業である。本来の目的から考えると「自分の生き方について考えた記述」があることが望ましい。その観点でワークシートの記述を分析すると第1回（5-1）は、「四本の木のみ」の記述が19（59%）であり、「四本の木と自分の生き方」が6人（19%）、「自分の生き方のみ」が5人（16%）であった。「自分生き方について」の記述がある児童は11人（34%）に止まった（図5）。

図5 「四本の木」のふりかえり分類（5-1）

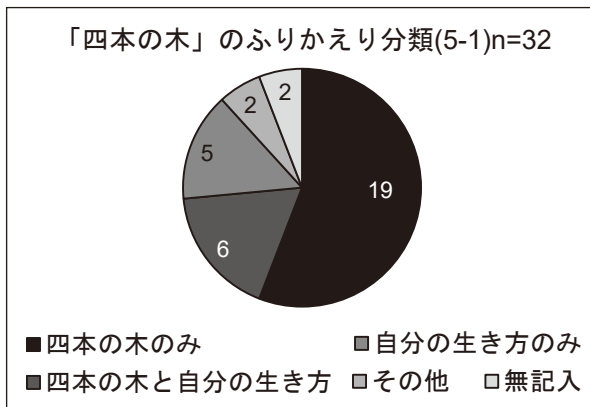
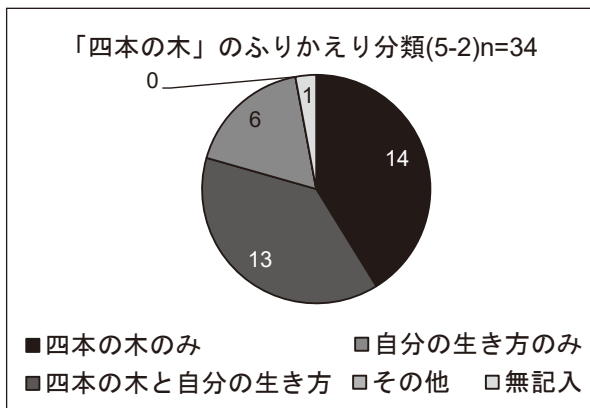


図6 「四本の木」のふりかえり分類（5-2）



一方、現地教員と協働実践をした第2回（5-2）は「四本の木のみ」の記述が14（41%）であり、「四本の木と自分の生き方」が13人（38%）、「自分の生き方のみ」が6人（18%）であった。「自分の生き方について」の記述がある児童は19人（56%）おり、第1回（5-1）よりも多いことがわかった（図6）。

この差は、目指す価値について何度も問いかけ、未来の自分を考えるアプローチを第2回（5-2）の協働授業で行っていたことによるものであろう。教師主導の授業に見えるが、目指すねらい

に向けた授業こそがValueの授業であることが分かる。

②「どんな木になりたいか」の記述分類

フィリピンの児童は今回の授業を通してどんな木になりたいと考えたのだろうか。

表5 「どんな木になりたいか」記述分類（2クラス）

[四本の木から] 51 (77%)			
・一樹	15	・友樹	23
・優樹	4	・大樹	9
[その他の木] 15 (23%)			
・強い木	3	・ハンサムな木	1
・背が高く、美しい木	1		
・森のような美しい木	1		
・フレンドリーだけど、独立した木	1		
・より強い幹をもち、独特な特徴をもつ木	1		
・桜の木	1		
・リンゴの木	1	・マンゴーツリー	1
・ソフトでしなやかで、信念を持った木	1		
・丘の上に立ち、たくさんの木が集まる木	1		
・背が低くて、実をつけて、その実をみんなに分け与えられる木	2		

今回の学習を通して学んだ木から選択したものが多いことがわかる（表5）。

一樹を選択した理由については「決してあきらめないところ」が最も多く、困難に負けない心や生き方が支持されている。友樹を選択した理由については「たくさんの友達がいるから」「困ったら助け合いたい」等の理由が多かった。優樹を選択した理由は「強くしなやかになりたい」「柔軟で変化に対応できるようになりたい」等の理由が多かった。大樹を選択した理由は「独立して生きていけるようになりたい」「一人でも生きられるから」などの理由が多く、第2回（5-2）の方が多かった。選択した木は、これまでのすべての実践（大学生や教員免許状更新講習を含む）で集団によって、違いがあり、前回（2019）、前々回（2018）のフィリピンでの実践でも、「一樹が多いクラス」と「友樹が多いクラス」等が分かれている。

特徴的なものは「その他」にある「リンゴの木」「マンゴーの木」のように「実がなる木」を選択することである。それは、「食べ物になる」「みんなに分け与えられる」等の理由があり、自分だけでなく、「周囲の幸せ」も考えているところが特徴である。前回（2019）の実践では友樹を選択した児童がその理由として、「森を作ってそ

こに住む動物たちの食べ物を生み出す。森は動物たちのシェルターの役割を果たす」ことを述べていた。これは、前々回（2018）も同様の理由を記述する児童がおり、自分がたくましく生きるだけでなく、周囲の幸せも考えた意識が育っていることがわかる。その背景には、宗教（カトリック）の影響が強いと考えられるが、日本の児童生徒の記述、大学生の記述にはほとんどみられない。

今回、授業の改善点として新設した「そのような木になるためにどうしますか」の記述は次のとおりである（表6）。（第1回（5-1）のみ）

表6 「そのためにどうするか」記述例（5-1抜粋）

【一樹】

- ・つらい時でも決してあきらめない。（多数）
- ・よくない時でもトライしたい。
- ・自分、学校、何かを必要としている人を思いやって尊敬する。
- ・人生をあきらめず、神を信じる。信念をもつ。

【大樹】

- ・どんな災害からも生き延びて一人で生きていく。
- ・自分と似ている。

【優樹】

- ・自分をコントロールする方法を学ぶ。
- ・しなやかになる訓練をしたい。

【友樹】

- ・コミュニケーションをとってフレンドリーにする。
- ・みんなを尊敬し、みんなに尊敬してもらう。
- ・他の人を助けたり、親切にしたい。

【その他】

- ・自分自身を大切に自分で自分に頼る。
- ・もっと勉強する。
- ・助けを必要としている人を助ける。
- ・自分の人生を幸せで素晴らしいものにします。

「問い」の意味を理解していない記述（「自分と似ている」等）も散見されたが、選んだ木にかかわらず、最も多く出てきたのが「決してあきらめない」であった。また「勉強（練習）する」「親切にする」なども複数回でてきている。

今回、加えられた「問い」により、具体的に考えられたのではないかと解釈する。

全体を通して、「周囲の幸せ」に関する記述が減少している。これは実践校が変わったこともあるだろうが、それ以上に、「考える時間の問題」があると考えられる。改善案で「そのためにどうする

か」を考えさせる時間をとったことで、「なりたい木」と「その理由」を考える時間が短くなった。つまり深く自分を見つめて「なりたい木」をじっくり考えた時（前回、前々回）よりも浅い部分での思考になってしまったのではないかと考える。これまでの実践のワークシートは、記述スペースも多くとってあり、自分の思いを書くことができるようにしていた。

今回の実践だけで、判断をするのは早計かもしれないが、「深く考えさせる」という点も今後は意識していきたい。

6. 総合考察

（1）「四本の木」が受け入れられる背景について

「四本の木」をフィリピンで実施しようと考えた当初は「日本の道德教材や指導方法が海外でも通用するのか」という課題意識があった。そのため、教材の選択にあたり、当時、千葉大学に留学中のフィリピン人現職教員（理科教育）から、教材についての意見を求め、用意した3本の教材中で最も支持があった、「四本の木」を最初の実践教材としたのである。そして、「四本の木」を視覚的にわかりやすいようにパワーポイントを作成した。指導方法は、価値の明確化理論の授業ステップで進めることで、結論をまとめるものではなく、それぞれの生き方を考える教材として効果があると考えた。

実際に過去の実践（2018・2019）では指導方法を少しずつ改善しながら進めてきたが、どの実践も児童の評価は高く、参観した現地教員からも高い評価を得ている。

その背景について今回検討をしたところ、フィリピンは90%がキリスト教徒であり、実践校のサンカルロス大学附属初等中等学校はカトリック系の私立学校であることが挙げられる。現地で実施している「Value」との親和性が高いほか、長濱（2014）によると、もともとのフィリピンの教育が「全人・統合的アプローチ」が基礎にあり、「価値の明確化理論」を基に構成されていたという。つまり、今回の教材や指導方法がフィリピンのValue授業とも合致していたことがわかったのである。

そして、価値教育の教科書は①自己との関係、②他者との関係、③コミュニティとの関係、④神との関係によって構成されている（長濱 2014）ことから、「神」や「信仰」に関する意識が「四本の木」の授業での選択・判断・記述にも表れていることがわかる。

このように考えると、「四本の木」はフィリピンの Value の授業に新たな教材を提供したともいえ、Value 教育の充実に役立つものではないかと考える。

（2）協働授業から学ぶもの

今回の実践では、リレー式の協働授業ができたことが大きな成果として挙げられる。現地教員 A の授業は、フィリピンの Value の授業を目の当たりにした気がした。これまでは、日本の教材・指導方法の実践中心の研究であったが、Value の授業や指導方法についても、もう少し学ぶ必要があると考える。

学ぶ点として、まずは「教材分析」である。しかも、明確なねらい（「Value」としての視点）をもとにどのような価値が教材に含まれているのか、そして、どのような価値に気づかせるべきなのかを現地教員 A は、「四本の木」を「人間の基本的特徴」「価値／態度と行動」に整理している（表 2）。その結果、児童は「四本の木」から学ぶものが明確になり、さらに現地教員 A の投げかけによって、自分の生き方をより深く考えることにつながったのではないかと考える。

次に、ねらいへの意識である。Value 教育は、キリスト教（カトリック）の教えを背景としているため、目指しているものが明確である。日本の道徳授業においてはこの意識がやや低い。価値の押し付けにならないようにする展開が多い。しかし、一方で、道徳的諸価値の理解が浅くなってしまわないかと考えることもできる。今回の実践では、日本人教員の実践（5-1）と現地教員との協働での実践（5-2）では、児童の評価は、日本人教員の実践（5-1）がやや高いものの、ねらいの達成度の面では、現地教員との協働実践（5-2）の方が高いという結果がでている（図 1、図 2、図 5、図 6）。

今後の日本の道徳授業の在り方を見直す視点としたい。

（3）Value 教育への理解の必要性

今回の実践を通して、改めてフィリピンの Value 教育（授業）への関心が高まった。日常の授業はどのような教材でどのような指導がなされているのか。講義形式なのか、多様な指導方法があるのかなどを改めて調査したいと考えた。

実は、2022年にサンカルロス大学附属初等中学校で使用している Grade 6 の「Value」の教科書を入手した。内容については、かなり宗教色が強く、日本での活用（応用）は難しいと判断した。しかし、実際の Value の授業は見ておらず、どのようなアプローチをするのか、調査をする必要があると今回の実践を通して考えた。

（4）今後の課題について

まず、現地教員との協働実践研究の継続が挙げられる。2018年、2019年の実践では、現地教員とのコミュニケーションが円滑となり、2019年には協働で授業をすることにより、より充実した実践となった。

本実践は別の学校での実践であり、急遽決まった協働実践であるため、打ち合わせも十分に行うことができなかった。今後は、継続して協働実践をすることを通して、道徳授業の改善を検討していきたい。

次に、フィリピンでの評価が高い「四本の木」であるが、他国で実践した場合はどうなのか。フィリピン以外の国での実践が課題となる。

さらに、多文化共生社会実現に向けた道徳授業の充実のためには、新たな教材開発、指導方法の継続開発が課題である。

※本研究は、松田憲子 JSPS 科研費 JP20K22219 の助成を受け、共同で実施したものである。

引用・参考文献

- 文部科学省（2015）「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科道徳編」文部科学省
上藺恒太郎・眞榮城善之介・岡崎耕（2014）「日本と台湾の共通道徳授業の意義と学習案」『教育実践総合センター紀要』13巻、61-69.
釜田聡・堀之内優樹・周勝男（2020）「『異己』理解共生を目

ざした国際理解教育のプログラム開発』『上越教育大学教職大学院研究紀要』第7巻、81-94.
 佐藤郡衛（2019）『多文化社会に生きる子どもの教育 外国人の子ども、海外で学ぶ子どもの現状と課題』100、105-110. 明石書店
 関根明伸（2018）『韓国道徳科教育の研究：教科原理とカリキュラム』東北大学出版会
 関根明伸（2021）「第18章 韓国」『新道徳教育全集第2巻 諸外国の道徳教育の動向と展望』学文社
 土田雄一（1998）「国際性を育てる道徳の授業」明治図書
 土田雄一（2018）「海外における道徳授業実践研究―フィリピンでの「四本の木」の実践を通して―」日本道徳教育学会第92回大会発表資料
 土田雄一（2019）「海外における道徳授業実践研究Ⅱ―フィリピンでの「四本の木」の実践を通して―」日本道徳教育学会第93回大会発表資料
 土田雄一（2023）「多文化共生社会実現に向けた道徳授業の構築を目指してⅢ―フィリピンでの「四本の木」の協働実践

を通して―」日本道徳教育学会 第102回大会発表資料
 長濱博文（2014）『フィリピンの価値教育 グローバル社会に対応する全人・統合アプローチ』九州大学出版会
 松尾知明（2017）『多文化教育の国際比較 世界10カ国の教育政策と移民政策』183、207. 明石書店
 松田憲子・土田雄一（2021）「多文化共生社会実現に向けた道徳授業の構築を目指してⅠ―教科書教材の分析」『千葉大学教育実践研究』第24号、23-34.
 松田憲子・土田雄一（2022）「多文化共生社会実現に向けた道徳授業の構築を目指してⅡ―韓国道徳教科書を基にした教材開発と実践―」『千葉大学教育実践研究』第25号、81-93.
 松田憲子（2023）「多文化共生社会実現に向けた道徳授業海外協働実践研究」科学研究費助成事業研究成果報告書

謝辞

本研究に際し、サンカルロス大学附属初等中等学校の先生方、そして子供たちのご協力を得たことに感謝の意を表します。

つちだ・ゆういち 教育学部・教授
 まつだ・のりこ 神田外語大学・特任准教授